

# St. Luke's International University Repository

Anticipating professional nursing practice: Trial and evaluation of a bridge program for graduating students Part2. - Basic training for drug administration within the given setting -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 好恵, 平林, 優子, 飯田, 正子, 松谷, 美和子, 佐居, 由美, 桃井, 雅子, 松崎, 直子, 高屋, 尚子, 西野, 理恵, 寺田, 麻子, 佐藤, エキ子, 井部, 俊子, Murakami, Yoshie, Hirabayashi, Yuko, Iida, Masako, Matsutani, Miwako, Sakyō, Yumi, Momoi, Masako, Matsuzaki, Naoko, Takaya, Takako, Nishino, Rie, Terada, Asako, Sato, Ekiko, Ibe, Toshiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00015035">https://doi.org/10.34414/00015035</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価（2） — 状況設定の中での与薬の基本演習 —

村上好恵<sup>1)</sup>, 平林優子<sup>2)</sup>, 飯田正子<sup>3)</sup>  
松谷美和子<sup>2)</sup>, 佐居由美<sup>2)</sup>, 桃井雅子<sup>4)</sup>  
松崎直子<sup>5)</sup>, 高屋尚子<sup>3)</sup>, 西野理英<sup>3)</sup>  
寺田麻子<sup>3)</sup>, 佐藤エキ子<sup>3)</sup>, 井部俊子<sup>2)</sup>

### 抄 録

【はじめに】近年の医療の高度化により、臨床現場では安全かつ高度な看護実践能力が求められるようになってきた。しかし、卒業直後の看護技術能力と臨床が期待している能力には乖離がある。そこで、就職前の学生が現実に近い状況を経験することで与薬に関する自己の課題を明確にすることを目的に演習プログラムを実施し、評価を行った。

【方法】2006年度A大学の卒業予定者を対象に演習とその評価を行った。

①演習シナリオを作成し、学習目標を設定した。学生は、1名につき、3名の異なる状況の模擬患者を90分間受け持ち、終了時に申し送りを行う。プリセプターが1名つき必要時支援を得ることができる。プリセプターは、学生が求めた際に支援を行い、同時にシナリオに沿って実施状況をチェックし、これをもとに振り返りを行う。その後、学生、プリセプター役、患者役、観察者役が集合し意見交換を行った。

②学生およびプリセプターから、学習目標の達成度および演習プログラムに関する評価を得た。

【結果】演習は、5名に実施した。

①学生は、学習目標をあまり達成できていないと評価し、与えられた時間内に状況に対応しながら実践する目標の達成度が低かった。プリセプターから、学生自身が実施中気づかなかった点を指摘された。

②演習プログラムについて、学生・プリセプターともに、演習目標の達成に効果があると評価していた。

③全体会では、学生は、患者役やプリセプターの先輩看護師からどのようにリアリティショックを打開していくかアドバイスを受けた。

【考察】学生は、未経験の項目に加えて、既習の内容であっても状況が変化することで実施できなくなることに気づく機会となった。プリセプターの役割の明確化や環境設定に改善点はあるが、与薬技術の基本を確認し、患者の身体状況の把握と判断をしながら実践する演習として適切な設定であり、卒業前に行うプログラムとしては価値が大きいと考えられる。

キーワード：看護基礎教育、リアリティショック、与薬技術演習、看護実践

### I. はじめに

近年の医療の高度化、それに伴う入院期間の短縮化により、臨床現場では安全かつ高度な看護実践能力が求められるようになってきた。しかし、厚生労働省の「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報

告書（厚生労働省，2003）が指摘しているように、卒業直後の看護技術能力と臨床が期待している能力には乖離があり、そのことが新卒看護師のリアリティショックを引き起こし入職後1年以内の離職の要因のひとつもいわれている。

筆者らは、2004年に看護大学と病院のユニフィケー

受付日 2008年2月29日 受理日 2008年7月4日

1) 首都大学東京健康福祉学部看護学科, 2) 聖路加看護大学, 3) 聖路加国際病院, 4) 聖マリア学院大学, 5) 元聖路加看護大学

ションとして「看護基礎教育における実習のあり方検討会」を発足し、卒業後の臨床現場にスムーズに適応するための連携について文献レビュー(後藤他, 2007)やディスカッションを通して検討を重ねてきた(松谷, 2007)。筆者らが2005年に実施したリアリティショックに関する新人看護師への調査(佐居他, 2007)では、新人看護師が課題としてあげた内容の中でも、「点滴」「薬の扱い」については課題が多かった。この調査において、具体的に述べられていた新人看護師の与薬に関する困難な内容は、与薬が行われている複数患者の身体的状況を一度に把握すること、患者の状況に応じて医師の与薬指示を照会しどの指示内容を使用するのか判断すること、患者の状況に合わせて与薬技術の選択や工夫を行うこと、一定時間の中で薬剤や物品の知識を駆使して正確に与薬実施すること、与薬に関する事故の回避、薬剤の管理方法の把握などであった。さらに新人看護師は、看護基礎教育のカリキュラムに対して、実践状況に近い学習の機会の要望を述べていた。そこで、これらの課題や要望をふまえて卒業後臨床現場への適応につながる学内演習のあり方の検討を行ったので、ここに報告する。

## II. 研究目的

本研究は、卒業後の臨床現場への適応につながることを目標に現実に近い状況に設定した演習プログラムを作成し、就職目前の学生が、この演習プログラムを行うことにより、演習目標である、「与薬に関する自己の課題を明確にする」ことが達成できたか、また、本演習プロ

グラムが効果的な内容であったかを評価することが目的である。

## III. 研究方法

### 1. 対象

2006年度A大学の卒業予定者から研究参加の同意を得られた6名。

### 2. 演習方法および評価

#### 1) 演習目標と演習内容の設定

本演習の目的を、「与薬に関する自己の課題を明確にすること」とした。与薬の演習をより現実に近い状況の中で実施するために、先行研究で新人看護師の課題として見出された項目の中から、「複数患者の受け持ち」「時間内での業務遂行」「患者の状態により薬の使用を判断」「与薬に関する患者の質問に対応」「受け持ち時の状況を申し送る」などを盛り込むことを研究者間で検討し、シナリオを作成した(平林他, 2007)。この演習の中で達成すべき学習目標(表1)と、患者のおおよその状況、実施する与薬の種類はあらかじめ学生に提示し、事前学習を行って参加できるようにした。

① 場の設定：一度に3名の学生が演習できるように3ブースを設定し、午前・午後の2回に分けて演習を実施した。1つのブースの構成は、学生1名、3つの個室に入院している模擬患者3名、プリセプター役1名、観察者役1名であり、模擬患者、プリセプター役、観

表1 演習後の学習目標の達成度に関する自己評価

(n=5)

学習目標	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった	欠損値
1. 患者の状態を判断し、与薬の必要性を選択できる	0	2	2	1	
1) 患者の身体状況を判断するための行動(バイタルサインや観察・患者への質問・チャート等からの情報収集)がとれる	0	1	2	1	1
2) 患者の症状と病態を判断し、出されている指示を確認する	0	1	3	1	
3) 患者の状態に与薬が適していることが判断できる	0	1	4	0	
2. 正確に与薬を実施することができる(輸液・坐薬・経口薬)	0	0	4	1	
1) 指示された点滴を実施するための物品が選択できる	0	1	3	1	
2) 指示された薬剤を、間違いなく、正確に清潔に準備することができる	0	0	5	0	
3) 指示された薬剤を、正確に投与できる	0	1	3	1	
3. 与薬中の管理が適切にできる(正確に投与されている・安全・安楽が含まれる)	0	0	3	1	1
1) 指示された時間に与薬ができるように管理できる	0	0	2	3	
2) 輸液中に必要な観察ができる	0	0	5	0	
3) 輸血中の患者の観察ができる	0	0	4	1	
4) 坐薬を使用する患者の観察ができる	0	0	3	2	
4. 決められた時間内に実施できるように、行動計画が立てられる さらに現実に生ずる状況に対応しながら実施できる	0	0	2	3	
5. 必要時相談報告しながら実施できる	0	2	2	1	

察者役の計5名は病棟看護師、大学院生、大学教員であり全員看護師免許をもっている。特に、模擬患者役には、看護師としての臨床経験をもち、患者の実際的狀況を想定して演技できる者に依頼した。また、プリセプター役には、病棟においてプリセプターの経験がある、あるいは学生の臨地実習において実習指導の経験がある者を配置した。

- ② 学生の動き：学生は前半、後半の2つのグループに分かれて実施した。学生1名につき、個室に入院した3名の異なる狀況の模擬患者を90分間受け持つ新人看護師を想定し、相談役としてプリセプターが1名つき必要時支援を得ることができるようにした。3名の模擬患者に設定した与薬の技術は、輸血（施行中の管理）、輸液（ライン確保の援助、抗菌薬開始時の援助、輸液中の管理、ボトルの交換など）、経口与薬（患者の狀態確認、狀態と指示票との照合、適切な時間に与薬）、坐薬（患者の狀態の判断、指示票との照合、坐薬挿入、挿入後の観察）など既習の基礎的な課題が含まれるように設定した。学生は受け持ち時間前に指示票や患者情報を確認し、実施する与薬の準備ができるようにし、終了時には受け持ち時間内の申し送りを行った。
- ③ プリセプターおよび患者の役割：患者役はシナリオで指示された時間に設定された言動をとってもらえるように打ち合わせた。プリセプターは、学生が求めた際に支援を行うようにし、同時にシナリオに沿って作成された、実施すべき項目が行われているのかチェックを行う役であり、事前に役割を説明した。
- ④ 演習終了後に、学生にはシナリオが渡され、プリセプター役とともにシナリオに沿って実施した内容の振り返りを行った。プリセプター役は実施項目の評価と学生の行動に関して気づいた点をフィードバックした。その後、参加した学生、プリセプター役、患者役、観察者役が集合し、学習目標に関する達成度の確認、与薬管理時の留意事項の再確認、プログラムの感想、改善点などの意見交換を行った。

## 2) 評価

### (1) 学習目標の達成度に関する評価

学生からの評価は、質問紙を用いて、学習目標の各項目に対して、「よくできた」から「できなかった」の4段階での評価および学習目標達成に関する自由記載を求めた。プリセプターからの評価は、プリセプターが実施した、シナリオに沿ったチェックリストからの評価と、自由記載により回答された学習目標達成に関する課題により評価した。

### (2) 演習プログラムに関する評価

学生とプリセプターからは、このプログラムで演習目標を達成することができるかについて、「よくできた」から「できなかった」の4段階での評価を得た。プリセプターには、今回の演習プログラムで各学習目標が効果

的に経験できたかについて、「効果的に経験できた」から「効果的に経験できなかった」の4段階で評価を求めた。また、学生およびプリセプターから、演習に関する感想や、改善点について自由記述を求めた。患者役にもプログラムに参加しての感想を記載してもらった。

## 3. 倫理的配慮

学生には、成績に関係しないこと、自由意志による研究参加の保証、結果公表の際のプライバシーの遵守等の倫理的配慮等について文書および口頭で説明し、同意を得た。本研究は、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：06 - 073）。

## IV. 結果

演習は、当日参加可能だった5名に対して実施した。

### 1. 学習目標の達成度に関する評価

学習目標について、学生は全体的にあまり達成できていないと評価し、多くは「あまりできなかった」と自己評価していた（表1）。

#### 1) [学習目標1. 患者の狀態を判断し、与薬の必要性を選択できる]

学生の評価では、「できた」2名、「あまりできなかった」2名、「できなかった」が1名であった。『患者の狀態を判断する行動がとれる』『患者の症状と指示を確認』『患者の狀態と与薬が適していることが判断できる』は1名が「できた」と評価した。具体的な課題としては、学生からは、“狀態を正確に記録する”“患者のところに行く前に何を観察するのか準備する”などがあげられた。プリセプターからは、“患者の狀態把握にはさらにフィジカルアセスメントなど多くの手段を用いること”“患者から報告された測定値（血糖値）をメモしていないためデータの把握があいまいになる”などの指摘があった。

#### 2) [学習目標2. 正確に与薬を実施することができる]

学生の評価は、「あまりできなかった」が4名、「できなかった」が1名であった。『点滴物品の選択』『薬剤の正確な準備』に関する目標では、学生からは、“物品の選択ができない”という課題が出された。プリセプターからは、“ライン確保の準備ができない”“アンプルの吸い方、ミキシングの方法が不確定”“清潔に物品を操作し薬液を準備することが難しい”“準備が聞かないとできない”などの課題があがり、かなりプリセプターの支援を受けて準備が行われていた。『薬剤を正確に投与』の目標では、多くの学生が“ネームバンドの確認忘れ”を指摘され課題としていた。またプリセプターからは、“物品の安全な配置に配慮して実施する”“患者が確実に服薬したかの確認”“高齢者に坐薬を挿入する際に確実に入るような手技が必要”“患者に与薬が行われた後の注意を説明することが抜ける”などの課題が示された。

3) [学習目標3. 与薬中の管理が適切にできる]

ほとんどの学生が「あまりできなかった」あるいは「できなかった」と評価し、課題が多く認識された項目であった。

『指示された時間に与薬ができるように管理』は3名が「できなかった」と回答していた。この具体的課題としては、“準備にかかる時間の予測ができない”“必要物品の準備ができない”“全体の時間配分ができない”などの課題が関連した。この項目に関してはプリセプターに支援を求めることが多かった。

『輸液の管理』では、学生、プリセプターの両者から“滴下数だけでなく、実際どのくらい投与されているか確認できなかった”“挿入部の確認、ルート全体の確認がおろそかになった”“輸液ボトルの交換ができない”という課題が出された。

『輸血中の管理』は学生からはあまり課題としてあがらなかったが、プリセプターからは、“輸血パックの血液型・氏名などの確認、輸血時に生じる症状の有無などの基本的な観察ができていない”“ルートの確認が中途半端”“輸血終了時間の質問に対し、指示票上の計算で回答しているが、実際の残量との関連を考えられていない”などがあつた。

また、『輸液』『輸血』『座剤』すべての管理において、“副作用の確認が不足している”ことも両者から課題として

示された。抗生剤使用後の確認や、座剤使用後の患者の状態確認を計画することなどが学生の行動として行われておらず、学生は、“薬の知識不足で副作用が確認できない”と記述していた。

4) [学習目標4. 決められた時間内に実施できるように、行動計画が立てられる。さらに現実に生ずる状況に対応しながら実施できる]

学生は、「あまりできなかった」2名、「できなかった」3名と評価した。“複数患者に投与されている与薬を同時に管理し、経過を判断すること”“全体の時間配分”“今の状態だけでなく周囲の患者の病態にも目を向ける”といった課題が学生から示された。プリセプターからは、上記の課題に加えて具体的に、“患者の安全管理に配慮すること(ナースコールや、ベッド柵を上げるなど)”“今行っていることでいっぱいになってしまい、時計に目がいかなくなっている”などが指摘された。

5) [学習目標5. 必要時相談報告しながら実施できる]

学生の評価は、「できた」が2名、「あまりできなかった」が2名、「できなかった」が1名であった。学生から出た課題は、“相談の仕方がわからない”“わかりやすく伝えること”“迷ったこと、わからないことは先輩に質問する”などがあげられた。プリセプターからは、“なんでも行う前に聞いてくる”“確認したい内容が不明瞭”

表2 演習後の学生の感想 (自由記載)

(n=5)

- ・複数患者を初めて経験したのでリアリティショックだった
- ・自分がほとんど何もできないことに改めて気づき少しショックを受けた
- ・知っていることが活かせず、知識が実際の現場と結びつかなかった
- ・与薬をつくることから管理までやったことがなかったのといっぱいいっぱいだった
- ・実習でもあまり点滴を見ていなかったことに気づかされた
- ・実習で見ていたが、物品の準備など古い知識をひっぱり出して行うことになった
- ・与薬に気をとられ、患者を看ること、患者の訴えや体の状態をアセスメントすることができていなかった
- ・安全という転倒予防くらいしかしていなかったが、安全に業務を行うことについて学びを得た
- ・実習中での複数受け持ちは辛くなりそうだが、このような形式での経験は勉強になった
- ・病棟でとてもかなり緊張するだろうと思うが、いろいろな気づきができるこの演習があつてよかった。ワンクッションおくことになった
- ・4年生で病棟実習に出る機会のない学生には今後も是非やってほしい
- ・注射や点滴などは普段自己学習室においていないため演習前後に学習の機会があるとよい
- ・プリセプターにどれくらい頼ってよいのかがわからなかった
- ・静か過ぎて、かなり緊張した

表3 プリセプター役、患者役によるプログラムの評価 (自由記載)

プリセプター役

- ・シナリオが実際の場面をイメージしやすいので課題を見つけやすい
- ・与薬の知識に加え、複数患者をみるという周囲のことや兼ね合いを考えながら与薬を行うよい機会である
- ・実際の体験とフィードバックがあり課題が整理され気づきやすい
- ・複数患者や多重責務という実際の場面に近い状況設定での演習であり課題を見つけやすい
- ・プリセプターとしての演習時の役割をもっと明確化することが必要である
- ・シナリオをさらにシンプルにしても可能ではないか

患者役

- ・新人がどの程度の基礎知識や技術をもって就職してくるのがわかり、病棟での新人教育に活用できる経験を得た
- ・新人がいかに緊張して仕事に臨むのかがあらためて理解できた
- ・病院のスタッフがさらに参加できると相互に得るもの大きい

“何を支援してほしいのかうまく伝えられない”などがあり、申し送りでは、“数値のみ伝える、薬のこのみ伝えて患者の状態として伝えられない”“輸液の残量、症状の改善など、与薬を行った結果の伝え方が把握できていない”などがあげられた。

## 2. 演習プログラムに関する評価

各学習目標がこの演習で経験できるかについてプリセプターは、[学習目標4.決められた時間内に実施できるように、行動計画が立てられる。さらに現実を生ずる状況に対応しながら実施できる]と[学習目標5.必要時相談報告しながら実施できる]については、「効果的に経験できる」と評価し、他の項目は「経験することができる」と評価した。

「与薬の基本について自己の課題を明確にする」という演習目標がこのプログラムで達成できたかについて、学生は、「よくできた」2名、「できた」3名と評価し、プリセプターは「よくできた」2名、「できた」1名という回答であり、おおむねこのプログラムで目標が達成できたと評価された。

学生の自由記載からは、“複数患者を初めて受け持った”“与薬をつくることから管理までやったことがなかった”“知っていることが活かせなかった”など実習中に経験したことがないことや既習の内容にもかかわらず実施できていない現実に直面し、リアリティショックを体験していたが、よい経験であったと評価していることが明らかとなった。また、学習方法について事前の演習や、環境等について希望が出された(表2)。

プリセプターおよび患者役からは、演習環境の設定やプリセプターの役割の明確化、シナリオの焦点化については改善の余地があることが示された(表3)。

## 3. 全体会での振り返り

終了後の全体会では、学生、プリセプター、患者役それぞれが演習に参加しての感想を述べた。その中では、学生の課題が指摘されたり、それに対する具体的なアドバイスが示されたほか、患者役やプリセプターの先輩看護師からは、学生の気持ちに対する共感や、新人看護師となった際に皆が経験する気持ちなどが話され、“時間ごとの行動計画を立てること”“メモをとること”“上手に支援を得ること”“調べる方法をわかっていること”など、どのようにリアリティショックを打開していくかの方法もアドバイスされた。

## V. 考察

### 1. 新人看護師への移行演習プログラム試行による学習目標の達成度

今回、就職を目前に控えた学生が現実に近い状況に設

定された演習プログラムを実施することにより、与薬に関する自己の課題を明確にすることを目的として移行演習プログラムの試行を行った。多くの学生が、各学習目標に対して「あまりできなかった」「できなかった」と評価していた。

学生ができなかった技術には、実習中に経験したことがないためできなかった項目が含まれている。例えば“ライン確保の物品準備”“アンプル・バイアルの扱いやミキシング方法”“輸血中の管理”などの与薬に関する具体的な技術や“複数患者を受け持つ”“決められた時間の範囲内で時間調整を行いながら実施する”というタイムマネジメントや“プリセプターへの相談の仕方がわからない”といった先輩とのコミュニケーションの取り方に関するものであった。滴下数や留置針挿入部位の観察については実習中に経験しているが、点滴開始前の準備段階を見学する機会が少なく、また点滴作成に至っては実施しないため、準備する際に戸惑ったものと思われる。特に輸血に関しては、実習中に見学することも少ないため、実際にどのようなことに注意しながら管理することが求められているのかが理解できていなかったためできなかったと考えられる。また、タイムマネジメントや先輩看護師とのコミュニケーションは、実習中に日々行っていることではあるが、受け持ち患者が1名ではなく複数になり、病棟看護師がプリセプターと呼ばれるサポーターになる、など状況が変化すると、それに合わせて行動することは難しく、経験したことがない項目と同じような認識となっていたものと思われる。

一方で、“ネームバンドの確認忘れ”“患者の安全管理に配慮すること(ナースコールや、ベッド柵を上げるなど)”などは、基本的な技術であり、実習中にはできていたにもかかわらず、今回の演習中にはできていなかったとプリセプターから指摘を受けた。学生は、受け持ち患者に対してひとつの技術を確実に丁寧に提供しようと心がけているため、実習中はこのような基本的な技術はその必要性を理解し実施することができていた。しかし、今回のように複数患者の与薬に関する管理を決められた時間内で行うという未経験の状況におかれた際には、今何を行えばよいのか、さらには自分が今何を行っているのかさえもわからなくなり普段できていた技術ができなくなり、しまいには時計を見ることさえもできなくなる状況に追い込まれるのではないと思われる。これが新人看護師の中で生じている混乱なのかもしれない。学生が就職前に復習したい看護技術として「与薬」に関することが多い(古屋他, 2006)のは、「与薬」技術は臨床実習では未経験なため、自らの知識や技術が不足しており、就職後に課題となることを学生は自覚しているためと思われる。しかしながら、就職後に、学生時代には一つひとつできていた既習の基本的なことができなくなる状況は予想外のことであり、このことで自信を失い、さまざまな技術ができないことが重なりリアリティショッ

クを受けるのかもしれない。

Alfaro-LeFevre は、看護に必要な技能は「手を使う技能」「頭を使う技能」「人間関係を使う技能」の3つであると述べている (Alfaro-LeFevre R, 江本愛子監訳, 1996)。臨床現場では、これらの技能を統合した実践能力が求められるが、就職前の学生には備わっておらず、新人看護師の日々の経験の中で確立していくものである。したがって、臨床現場へスムーズに適応していくためには、本演習プログラムのように、学生自身が未経験の項目に加えて、既習の内容であっても状況が変化することで実施できなくなることに基づき、自己の課題を明確にする経験をするのが大切であると考え。その結果として、新人看護師としてのリアリティショックを軽減する一助になりうると考えられる。

## 2. 与薬演習プログラムの評価

今回の演習プログラムは、より実際の臨床場面に即した設定としていたため、プリセプターからは各学習項目がこの演習で経験できるという評価を得ることができ、さらに学生およびプリセプターから与薬に関する自己の課題を明確にすることができるプログラムであった、という評価を得ることができた。

実習では、1人の患者を受け持ちじっくりと取り組むことができるが、就職後は、複数の患者を受け持つ、業務を覚える、専門的知識を身につける、新たな物理的・人的環境に慣れなければならないなど新人看護師にとって一気に状況が変化する。このような新たな状況について、就職前に疑似体験する演習プログラムは効果的であると考え。特に、身体侵襲を伴う技術は実習中の経験が少ないため、「与薬」をテーマとして選択したことは意義がある。高橋らも、就職前の技術演習として「与薬」について講義および演習を学校と病院の協働で実施し、卒業生が不安なく就業し効果的であると報告している (高橋他, 2004)。また、「使える技術」をめざし自己注射や血糖測定を演習に取り入れ技術演習教育を行っている齋藤らが、「臨床と同様の医療機器や物品を直接扱う技術に対して学生の興味は大きく学びも深かった」と報告している (齋藤他, 2003)。

このように、「与薬」について医療機器や物品を実際に用いて、模擬患者に提供する本演習プログラムは、扱ったことがないため不安は大きいものの、学生の挑戦してみたいという探究心を促進し、単なる技術の獲得ではなく患者に提供する際に必要な知識を学び直すというよい経験となったと考える。すなわち、「学生の判断能力と主体性を伸ばすためには、学生自身が気になったり、困ったりした出来事の意味を考え、その解決のための方法を探求していくことが必要である」(安酸, 1999)といわれているように、学生自身が自己の課題を明確にできる本演習プログラムは効果的であり、就職後の新たな環境において困難な場面に遭遇した場合

に解決策を模索する手がかりなると考えられる。

また、演習終了後の学生とプリセプター、患者役、観察者役との意見交換会も有効であった。学生にとっては、先輩看護師から今回の演習内容から派生して新人看護師として直面するであろう課題とそれへの具体的な対策、そしてこの課題は誰もが新人時代には経験することであることを聞き、漠然としていた不安が少しは軽減していた。そして、新人看護師を迎え入れる先輩看護師としても、就職してくる新人看護師の現状を知ることができ、4月以降の教育方法への示唆が得られたと述べていた。したがって、新人看護師の臨床現場へのスムーズな適応を促進するために、病棟看護師の演習への参加を仰ぐことも検討していく必要がある。

さらに、古屋らが、卒業時に採血・筋肉注射・輸血の基礎技術演習を行った結果、「演習を通して知識のあいまいさを実感した学生が就職までの期間に復習した技術項目は与薬が一番多かった」(古屋他, 2006)と報告しているように、本演習プログラムに参加した学生も、普段から注射や点滴などの自己学習ができるような学内での環境設定を希望しており、自由に学生が学習できる場の提供を検討する必要がある。

本演習プログラムを引き続き実施していくためには、改善および検討が必要な点もある。1つ目には、プリセプターから意見が出されたように、プリセプターの役割の明確化である。本演習プログラムにおいてプリセプターは、学生のための補助者でもあり、実施内容の評価者でもあり重要な役割を担っている。したがって、今後は役割の範囲や評価方法などを検討する際に、プリセプター役と企画者が十分な打ち合わせを行う必要がある。

2つ目は、さらに多くの学生に試行することでプログラムの内容を洗練していく必要があるが、現行のプログラムでは、学生1名の演習に対してプリセプター役1名、患者役3名、観察者役1名の計5名の人員を要する。したがって、一度の演習での受け入れ学生数を多くしながら状況設定のシナリオを実施するには、演習時間の短縮化、役割の少ない患者役に人形をあてるなどの工夫が必要になる。

3つ目は、実施する学生が緊張せず、落ち着いて演習できるような環境設定が必要である。このようにいくつかの改善が必要ではあるが、与薬技術の基本を確認し、患者の身体状況の把握と判断をしながら実践する演習として適切なシナリオ設定であり、卒業前に行うプログラムとしては価値が大きいと考えられる。

## VI. 結論

卒業予定の学生5名を対象に、現実に近い状況に設定された演習プログラムを作成し、与薬に関する自己の課題を明確にすることを目的に演習プログラムを実施とその評価を行った。演習を行い、学生は未経験の項目に加

えて、既習の内容であっても状況が変化することで実施できなくなるため、就職前にこのような自己の課題を明確にする経験をするのは大切である。また、与薬技術の基本を確認し、患者の身体状況の把握と判断をしながら実践する演習として効果的な経験ができるプログラムであると評価を得た。

本研究は文部科学省の助成を受けて行った活動の一部である〔平成 18 年度大学教育高度化推進特別経費(教育・学習方法等改善支援経費)〕。

## 引用文献

- Alfaro-LeFevre, R. (1996). 江本愛子監訳 (1996). 基本から学ぶ看護過程と看護診断 (第 3 版). (14-24). 東京: 医学書院.
- 古屋敦子, 橋本さき子, 齊藤和香子, 他 (2006). 学生の修得度を踏まえた看護技術教育の強化. *看護展望*, 31 (9), 98-102.
- 後藤桂子, 松谷美和子, 平林優子, 他 (2007). 新人看護師のリアリティショックを和らげるための看護基礎教育プログラム 実践研究文献レビュー. *聖路加看護学会誌*, 11 (1), 45-52.
- 平林優子, 村上好恵, 飯田正子 (2007). 【実践力が育つ学内演習-聖路加看護大学における取り組み】実践力を育てる 3 つの演習 (演習 2) と薬の基本を学ぶ. *看護展望*, 32 (8), 776-782.
- 厚生労働省 (2003). *看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書*.
- 松谷美和子 (2007). 【実践力が育つ学内演習-聖路加看護大学における取り組み】臨床-基礎教育の連携による学内演習の構築. *看護展望*, 32 (8), 764-768.
- 齋藤君枝, 上野公子, 池田京子 (2003). 「使える技術」を目指した糖尿病自己管理技術演習の教育評価—成人・老年看護学ケア演習を通して—. *新潟大学医学部保健学科紀要*, 7 (5), 621-626.
- 佐居由美, 松谷美和子, 平林優子, 他 (2007). 新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムの在り方. *聖路加看護学会誌*, 11 (1), 100-108.
- 高橋明美, 鈴木昌子, 小野智佐子, 他 (2004). 就職前の技術演習の意義 学校と臨床をつなぐ技術教育. *看護教育*, 45 (3), 170-174.
- 安酸史子 (1999). 経験型実習教育の考え方. *Quality Nursing*, 5 (8), 4-12.



# Anticipating Professional Nursing Practice: Trial and Evaluation of a Bridge Program for Graduating Students Part 2

— Basic Training for Drug Administration within the Given Setting —

Yoshie Murakami

(Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University)

Yuko Hirabayashi, Miwako Matsutani, Yumi Sakyō, Toshiko Ibe

(St. Luke's College of Nursing)

Masako Iida, Takako Takaya, Rie Nishino, Asako Terada, Ekiko Sato

(St. Luke's International Hospital)

Masako Momoi

(St. Mary's College)

Naoko Matsuzaki

(Former St. Luke's College of Nursing)

**Introduction:** Although safety and advanced nursing practices and skills are emphasized in recent years, there is a gap between nursing skills possessed by new graduates and skills that are sought after. In this research, a training program with which nursing students can examine their own issues concerning drug administration before they are employed was implemented and evaluated.

**Methods:** The training program was given to students who were scheduled to graduate from University A in 2006.

①A training scenario was created along with the setting of a learning target. Each student attended three mock patients with different conditions for ninety minutes. Assistance from preceptors was available when needed. The preceptors checked and reviewed the implementation of the training in accordance with the scenario. In the end, the students, preceptors, mock patients, and observers all gathered to exchange their opinions.

②Evaluations on how much the learning target was achieved and on the training program itself were provided by the students and the preceptors.

**Results:** The training was implemented on five students.

①The students judged said they could not achieve the learning target very much. Students also evaluated that the achievement level of the target in time was low.

②Both the students and preceptors evaluated that the training program was effective in order for students to reach the goal of the training.

③During the plenary session, the students received advice on how to deal with reality shock from their senior nurses who acted as mock patients and preceptors.

**Conclusion:** This was an opportunity for students to see that they could not implement what they had studied when situation changed, as well as what they had not studied. Although there are many aspects to be improved, such as the clarification of preceptors' roles and choice of right settings, we believe this is a very effective program to implement before graduation.

**Keywords :** basic nursing education, reality shock, training program for drug administration, nursing practice